

オリンピック参加が空手道に与える影響について

大美明広

現在、世界各地で空手道を練習している人の数は総計約5千万人と推定される。1999年6月19日に開かれたIOC(国際オリンピック委員会)総会において、WKF(世界空手連盟)が世界の空手道を代表する団体として公式承認を得た。それにより、2004年以降に開催されるオリンピックに空手道が正式種目として採用される可能性が生まれた。次回のオリンピックの正式種目に関する最終的な決定は、その4年前に開催されるオリンピックの期間中に開かれるIOC総会で決められるが、今回のIOC決定により、長年空手界を分断してきたWKF(旧WUKO)とITKF(国際伝統空手連盟)との間の政治的紛争に決着がついた。これからは流派や会派の違いを乗り越えて、世界中の空手愛好者が手を取り合って空手道という武道／スポーツを前進させる時代が訪れるに違いない。

オリンピック参加は従来の空手道に大きな変化をもたらすだろう。我々が今後すべきことは、それを阻止しようとするのではなく、代々受け継がれてきた空手道の尊厳、技術的水準、価値観などをより一層高め、我々のこの伝統的な武道が、スポーツ界の一員として受け入れられるというだけでなく、敬意を持って迎えられよう努力を続けることである。

空手道は、東洋の文化と歴史の中で育まれてきたスポーツであり、心身を鍛え、気力を養い、人格を高め、慈悲の心と豊かな人間性を育むことを主眼とし、その普及は世界中の子供たちに数多くの恩恵をもたらすことができる。「オリンピックスポーツになる」ということは、ただ単に「オリンピックの場で競技が行われる」ということを意味するのではなく、「空手道(および空手家)がオリンピック精神に沿ったスポーツになる」ということをも意味する。こう言うと、立腹される伝統保存主義者の方々もおられると思うが、実は空手道は明治時代にすでにオリンピック精神を受け入れているのである。その経緯について次節で簡単に説明する。

空手が「スポーツ化」したのはいつか？

1896年、フランス人ピエール・ド・クーベルタン男爵の提唱により、ギリシャのアテネで第1回目の近代オリンピックが開催された。その直後、クーベルタン男爵からオリンピック競技への参加要請を受け取った明治政府は、「柔道の父」として有名な嘉納治五郎博士に対応を託した。嘉納は、1909年に日本人初のIOC委員となり、1912年にスウェーデンのストックホルムで開かれた第5回オリンピックへ初の日本選手団団長として参加した。嘉納の招きにより沖縄から船越義珍が東京を訪れ、在京していた沖縄人学生の儀間真謹と共に講道館で唐手の演武を行ったのは、その10年後のことである。

「スポーツ」や「体育」という概念は、それまで日本に存在していなかった。嘉納はクーベルタン男爵らの啓蒙を受け、1911年には日本体育協会を設立して会長に就任し、スポーツ(体育)を日本国民に普及する努力を行った。さらに嘉納は、日本古来の武術に着目し、それらを世界的なスポーツへ発展させることで、日本文化による世界文化への貢献を図った。嘉納自身が「柔術」から「柔道」を作り上げ、同時期に「剣術」から「剣道」が生まれ、船越により「唐手術」は「空手道」に改名された。植芝盛平による「合気道」が確立したのもこの時期である。

「術」から「道」への変更は、戦いのための技術であったものが、心身の鍛錬と発育を促すスポーツ(体育)へ変化したことを示すものである。しかしそこには、単なる「西欧化」ではなく、江戸

時代初期に確立された剣術と禅との融合（剣禅一如）に基づく「禅」の思想が組み込まれている。よく知られているように「武道」の「道」は禅の概念（「道教」から来たものではない）であり、「修行を通じて悟りに至る道（＝生き方・ライフスタイル）」を意味する。嘉納は、そこに古代ギリシャ人が理想とした「スポーツを通じた優れた人格の育成」という哲学との共通点を発見したのである。

船越が設立した松濤館の道場訓に「人格の完成に努むること」の一訓があるが、実はこれこそ空手における古代ギリシャのスポーツ理念と、日本古来の武術および禅の理念との融合を示すものである。自ら鎌倉の禅寺へ通って禅の修業にも勤しんだ船越は生涯を通じて教育者であり、同じく教育者であった嘉納博士を深く尊敬していた。「船越先生は講道館の前を通りがかる度に、電車の車内であっても帽子を脱いで深々と一礼された」と儀間真謹は伝えている。

クーベルタン男爵から嘉納治五郎から船越義珍へと至るオリンピック理念の伝達を通して、「戦うための武術」は「健全な肉体と優れた人格と平和と友情をもたらす」ことを目的とする「スポーツとしての武道」に発展し、他流派も追従して琉球唐手術は空手道となった。

次節では、オリンピックの基礎理念である「オリンピズム」と「武道」との哲学的関連性について述べる。

「オリンピズム」と「武道」

古代ギリシャと日本にはある程度の共通点がある。古事記に記載されている神々と人間との自由で自然な交流はギリシャ神話に類似するところがあり、真理を知覚し、真理の中で生きようとする態度においてはソクラテスなどの哲学者と道元や白隠などの禅僧との間に何ら違いはない。

近代オリンピックの基本理念である「オリンピズム」はスポーツに対する古代ギリシャ的な理想に基づくもので、クーベルタン男爵によりオリンピック憲章に盛り込まれ、オリンピック開催の意義と目的を示すものとなっている。特に注目すべきは次の2項目である（JOC 訳「オリンピック憲章」より抜粋）。

1. オリンピズムは人生哲学であり、肉体と意志と知性の資質を高めて融合させた、均衡のとれた総体としての人間を目指すものである。スポーツを文化や教育と融合させるオリンピズムが求めるものは、努力のうちに見出される喜び、よい手本となる教育的価値、普遍的・基本的・倫理的諸原則の尊重などに基づいた生き方の創造である。
2. オリンピズムの目標は、スポーツを人間の調和のとれた発達に役立てることにある。その目的は、人間の尊厳保持に重きを置く、平和な社会を推進することにある。

このような「スポーツを通じたより良い人間と社会の形成」という目的は、「武道憲章」に謳われている第一条（目的）「武道は、武技による心身の鍛錬を通じて人格を磨き、識見を高め、有為の人物を育成することを目的とする」、第二条（稽古）「稽古に当たっては、終始礼法を守り、基本を重視し、技術のみに偏せず、心技体を一体として修練する」、第六条（普及）「普及に当たっては、伝統的な武道の特性を生かし、国際的視野にたつて指導の充実と研究の促進を図るとともに武道の発展に努める」という武道の意義・目標と本質的に同じである。

洋の東西を問わず、スポーツと武道が共に共通の目標を実現し続けることにより、価値観の共有が生まれ、友情と友好が育まれ、真の国際理解と世界平和が可能になるであろう。そのためには、「オリンピック空手道」はオリンピズムと武道の両方の哲学を具現するものでなければならない。

武道におけるスポーツ競技

空手道は、琉球唐手術の技術と、日本古来の武術に内包する禅の思想と、古代ギリシャで発達したスポーツ（体育）との融合により形成され、発展を遂げてきた「武道」である。そして、戦いのための手段である「武術」とは異なり、心と技と体の健全な発育を目指すスポーツであるからこそ武道（剣道、柔道、空手道、弓道など）では「コンペティション（競技・試合）」が可能なのである。

江戸時代中期に竹刀と防具が考案されるまでは、剣術の稽古中に命を落としたり片輪になったりする者が多かったと言われている。また、試合とは「果し合い」のことで、負けた方は死ぬか重傷を負う場合がほとんどであった。しかし、剣術における竹刀と防具はあくまで稽古中の怪我を削減するために工夫されたもので、「競技」を行うためのものではなかった。剣術に限らず、「敵と戦い、敵を倒す」ことを主眼とする武術においては、相手に怪我をさせないためには威力（殺傷能力）のない技を使わざるを得ないため、一人で架空の敵を相手にする演武を審判が採点する方式の場合を除き、競技化は技の希釈化を招いて武術そのもののレベルを下げてしまう結果をもたらす。

「スポーツ競技」は古代ギリシャで行われた競技会に起源を持つもので、日本に紹介されたのは明治時代のことである。前節で述べたように嘉納治五郎博士の尽力がその普及を助けた。そのため、武術から武道が生まれる過程で、他の既存のスポーツと同様に競技が行われるようになったのはむしろ自然の成り行きであった。

自分の持つ技と体力と勇気を試して以後の練習の糧にすると同時に、そのスポーツを楽しみ、他の競技者との友情を育むのがスポーツ競技の目的であるが、スポーツや武道における「技」とは「そのスポーツ／武道を行うための技能」であって、武術における「技」と異なり「相手を殺傷する能力」を意味しない。それは、スポーツ／武道ではあくまでも「自分を高める」ことの方が「相手を倒す（殺傷する）」ことよりも重要なためである。

次節では、古代ギリシャの理想である「参加するスポーツ」と、古代ローマ帝国が導入した「見るスポーツ」との本質的な違いについて検討する。

「参加するスポーツ」と「見るスポーツ」－空手道競技ルールはどうあるべきか？

スポーツでは、誰もが安全にそのスポーツおよび競技を楽しめるようにルール（競技規則）が設定され、スポーツ自体がルールによって定義・規定される。そのため、ルールの変更によりそのスポーツの特性が変わってしまうこともあり得る。

古代ギリシャで発達したスポーツ競技であるが、ローマ帝国の時代に入ると、古代ギリシャ的な「スポーツによる人格の向上、肉体の鍛錬、友情の構築」といった価値観よりも、皇帝および市民に娯楽を提供する「見るためのスポーツ」としての意義が強調されるようになった。巨大なコロッセオ（円形闘技場）に数千人の観客を集め、剣闘士の戦い、戦車競争、競馬などに興じていた古代ローマ的な考え方がオリンピックにも悪影響を及ぼした。

近代オリンピックの創立者であるクーベルタン男爵も、その可能性を憂えて次の警句を残している。「まず第一に、スポーツにおける高潔性と騎士道精神を維持しなければならない。それによりはじめてスポーツは、古代ギリシャの人々がその素晴らしい恩恵を受けたのと同様に、現代の人々の教育の一環となり続けることができる。世間はオリンピック選手をプロのグラジエーター（剣闘士）に変えようとしてしまう傾向があるが、この2つは両立しない。」

このクーベルタン男爵の言葉の中で、「騎士道精神」は「武士道精神」と共通する高尚な生き方であり、彼が「グラジエーター」という単語を使ったのは、「ローマ帝国がしたようにオリンピックを見て楽しむための娯楽におとしめてはならない」という意味を込めてのことである。

空手道人口は近年急速に増大しつつあるが、それは WKF の制定する競技ルールが、空手競技を公平で、安全で、エキサイティングで、見ても楽しめる形に進化させてきたからに他ならない。そうした努力が認められて、今回の IOC による WKF の公式承認に至ったわけである。しかし、前述のクーベルタン男爵の警告にあるように、今後「見て楽しむ」ことを重要視し過ぎるルールに変更してしまうと、空手道が本来の目的から逸脱してしまうばかりでなく、実際の競技人口が減少し、観客の敬意を失い、衰退してしまう危険性もある。

そうした危険を避けて成功しているスポーツとしては、ゴルフ、テニス、フェンシングなどがある。これらのスポーツは、「見て楽しむ」ことを強調するルール作りをする必要なく大衆に受け入れられ、大会には多数の観客を動員している。それを可能にしたのは、そのスポーツの特長、ルール、伝統、楽しみ方などを広く一般に宣伝広告し、一般の人たちの参加を呼びかける努力を常に行ってきたからである。

空手道も、「参加するスポーツ」としての特性を維持しなければならない。そのためには、ルールはまず参加者の安全を第一に考慮する必要がある。ここで言う参加者とは、世界大会やオリンピックに出場する選手だけではなく、小学生から高齢者まで、初心者から上級者まで、地方大会から全国大会まで、あるいは全く競技に参加しないが道場で稽古する人たちも含まれる。空手道競技に参加する選手たちは賞金稼ぎのグラジエーターではなく、勝負で相手と対峙することにより自分と真摯に向き合い、内面の弱さを克服してより高い人間性の実現を求める求道者である。彼らの安全を犠牲にしてまで観客の目を楽しませてはならない。

プロレスやキックボクシングは、確かに見ていて面白く、エキサイティングな「見るスポーツ」である。しかし、それらは特殊なトレーニングを積んだ人たちのみが危険を冒して行うものであり、オリンピックが提唱する「誰もが参加できるスポーツ」ではない。

空手道の正しい普及には、今後数十年に渡る継続的な努力が必要とされる。競技の公正さを高めるためには、今後も優れた審判員の養成を続け、小さい子供でも安全に競技を楽しめるより安全なルール作りを推し進めることが大切である。さらに、大規模な宣伝・広報活動を行って、一般の人たちにも空手道の意義や歴史、伝統、名誉、尊厳、健康や教育上の効果、養われる不屈の精神力などを正しく認識してもらい、空手道の修行によってもたらされる恩恵や伝統的な智慧を理解し、共有してもらうことはきわめて重要である。

伝統的な空手道は、クラシック音楽やクラシックバレエと同じ高いレベルの芸術である。モーツァルトやベートーベンやバッハの曲は、それを演奏する音楽家の解釈に応じて多少アレンジされることはあっても、その音楽の本質を変えてしまうような変更が加えられた場合には「クラシック」とは呼ばれなくなる。芸術に奥行きを与えるのは伝統とそれを培った文化であり、空手道においてもそうした伝統は温存されなければならない。

さらに、空手道はその独自性を維持すべきである。空手道をテコンドー、柔道、ボクシングなどの「格闘技」に近づけるようなルールの変更を行うと、将来に渡って悪影響を及ぼし、ついには空手道そのものが消失してしまうかもしれない。

結論

IOC は、オリンピックに参加するスポーツの公認団体のあらゆるレベルに民主的な組織構造を要求するため、オリンピック参加を目指したことにより、空手道の諸団体は世界的にも、地域、国のレベルでも民主的な構造を持つようになった。しかしそれは同時に、意思決定が「お上の判断」ではなく、会員全体の総意によりもたらされることを意味する。したがって、空手道の将来を考えるのは我々全員の責任である。私が世界中の空手道コミュニティにお願いしたいのは、空手競技を「見世物」にするようなルールの改悪に反対し、一人一人が空手道の伝統的尊厳、精神、理想を保持しながら、「参加するスポーツ」としての空手道の健全な普及に必要な地道な努力を積み重ねることである。

クーベルタン男爵は次の言葉も残している。「オリンピズムは制度ではなく、人生に対する態度である。それは様々な形で表現され得るため、特定の人種や時代のみが所有できるものではない。」武道もそれと同じであると思う。東洋で生まれ、日本で育ち、世界に広まった空手道が、世界のスポーツ コミュニティに貢献し、今後世界中でより多くの子供たちがその恩恵を受け、地球上の人々に相互理解と平和をもたらすための一助となることを、心より祈る。

まとめ

- 武道は、日本古来の武術の技法および禅の思想（道）と、古代ギリシャのスポーツの理念（オリンピズム）とが明治期に融合して生まれた。
- 同時期に、船越義珍により「唐手術」が「空手道」に改名されたが、これは「戦う（敵を殺傷する）ための技術から、禅（東洋）とスポーツ（古代ギリシャ）に共通する「修行／練習により自己を高める」という目標を実現するための技術へ変遷したことの表れである。
- 「オリンピック空手道」はオリンピズムと武道の両方の哲学を具現するものでなければならない。
- ルールの改定は、空手道が、「参加するスポーツ」としての特性を維持できる範囲で行い、古代ローマ帝国がしたように「見るためのスポーツ／娯楽」におとしめてはならない。
- 空手道を「参加するスポーツ」として正しく普及するためには、世界的に大規模な宣伝・広報活動を行い、一般の人たちにも空手道の意義、歴史、伝統、名誉、尊厳、健康および教育上の効果・恩恵、伝統的な智慧などを正しく認識してもらい、理解と支持を得る必要がある。
- 「武道精神」と「オリンピズム」は本質的に同じであるという認識を持った上で、オリンピック空手道が世界文化に貢献すると共に、世界中の子供たちの教育、相互理解、友好、平和に寄与することを祈る。

あとがき

実は、この原文を書く数ヶ月前の1999年10月にブラジルのリオデジャネイロで開催された世界大会でエスピノサ氏が会長に選出され、彼の選挙公約であったルール改定作業が始まろうとしていました。ヨーロッパ主導のルール改定（改正とは呼びたくない）には、「観客受けする派手な技を出させる」と「日本ばかりが形で勝たないようにする」という意図が見えていました（ブラジル大会で日本選手が形部門を総なめしたため）。このエッセイを英文で書いて北米およびヨーロッパで出版したのは、極端な「見せるための競技」という発想に歯止めをかけると同時に、「創作形」の台頭を防ぐ、という狙いがありました。ヨーロッパでも広く知られている山崎清司氏を著者名としたのもそのためです。

その後、ヨーロッパが提案したルール改定案、日本案、私が起草したアメリカ案の3つが討議され、ヨーロッパ案とアメリカ案の折衷案でまとまったのが、現在のWKFルールです。日本案は、組手に4人副審制を提案するなど、非効率で観客に分かり難かった「昔に戻る」内容であったばかりか、ITKF的な考え方を支持しているような印象を与えたため、ほぼ全面的に無視されました。

実は、日本案を見たときに「これは無視される」と見通したアメリカ側の戦略は、ヨーロッパ案と日本案を対立させ、議論が焦げついたところで折衷案としてアメリカ案を提出し、少なくとも形競技だけは従来どおりのルール（ヨーロッパ案には採点基準の中にCreativity（創造力）が挿入されていた）を残してもらおう、というものでした。残念ながら、日本側にこの意図が理解していただけず、アメリカと日本が連合を組めなかったため、よりヨーロッパ案に近い形の新ルールが出来上がりました。しかし、形競技についてはヨーロッパ側がかなり（自主的に）譲歩したので、創作形の台頭は回避できました。このエッセイがそれに一役買ったのかな、とか思うこともあります。その数年後に「著者」である山崎清司氏は「WKF技術委員長」に任命されています。

「自分に有利なルールを作りたい」という願望は誰にでもあり、特に自国の威信がかかると圧力は高まります。しかし、「高潔性と騎士（武士）道精神」を掲げてそれと戦い続けることが、真の意味で「空手道の伝統を守る」ということだと思えます。

大美明広
2007年3月
カリフォルニア州サニーベールにて